



上/堤防樋管改築工事の現場全景。  
下/現場全体を管理している小笠。各所の安全確認を徹底して行われている。

輝け! けんせつ小町

# 現場監督

## 小笠真理恵

㈱奥村組 入間川工事所



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



# my Beginning

## 社会基盤を支えることが醍醐味

私が建設業界に入った理由

大学院時代、東日本大震災の被災地で農用水の研究を行い、人々の生活に役立つことの大切さを学んだ今号の小町。社会基盤を支えることに魅力を感じ建設業界に就職。仕事を丁寧に取り組み姿は周りから厚い信頼を得ている。

### 被災地で学んだこと

㈱奥村組に入社して四年目の小笠は、幼い頃から工事現場を見ることが好きだった。「小学生のときに両親に連れて行ってもらった黒部ダムが忘れられません。いくつもの交通機関を乗り継いで山奥まで行ったこと、ダムの

大きさ、放水の迫力、どれをとっても衝撃的でよく覚えていきます」

小笠は壮大なスケール感があり、たくさんの人の役に立つ土木に魅力を感じていたが、自然環境についても関心があったと言う。

「道路などの社会基盤を支えるインフラづくりも魅力的でしたが、生活のなかに深く関わっている水環境問題にも興味湧いてきて、大学は農学部に進学し農用水の水質や水流といった農業水文学について学びました」

生活に欠かせない水について学ぶなかで、より専門性の高い農業水文学へと足を進めた。「さらに知識を深めるため大学院へと進学し

ましたが、大学院に進んだ年に東日本大震災が起こりました。自分が学んできたことを被災地で活かしたいと思い、『農用水中の放射性セシウムに関する研究』というテーマで調査研究を始めました」

小笠は二本松市や南相馬市に足を運び、田んぼの農用水を採取し、放射性セシウム量の分析を行った。大学院修了までの二年間、毎週のように被災地と研究室を車で行き来し続けた。

「原発事故が起きた直後は、放射性セシウム自体の知識も乏しく、人体にどのような影響があるかも分からなかったため悩むことも多くありました。研究に行き詰まり今やっていることが本当に役に立つのか不安に感じることもありましたが、協力してもらった農家の皆さんに分析結果を報告したら『調べてくれてありがとう』と言われとてもうれしかったことを今でも思い出します。そのとき人々の生活のために少しでも役に立てたのではないかと感じる事ができました」

研究活動が一段落し、就職活動の時期を迎えると、小笠は建設業界と水処理業界の二つの分野のいずれかでの就職を考えるようになる。

「幼い頃から興味があった土木と学生時代に専攻していた水関係、どちらの業界で働こうか悩みましたが、被災地で建設業界が携わる復興事業を間近に見ているうちに、社会基盤の整備という面で幅広く仕事ができる建設業界の方が

my style

大学時代から国内外問わず旅行をすることが好きです。働き始めてからも年に1回は時間を見つけて海外旅行に行きます。自然を見ることが好きですが、就職してからは構造物も気になってきました。職業病かもしれません(笑)。今まで行った国では、ウズベキスタンが一番好きです。あまり知られていませんが、美味しいご飯、親切な人々、治安もよくて居心地のいいところでした。6月に仕事が一段落するので、スペインへ行く計画を立てているところです。



「去年の冬にはニューヨークへ行きました。街中で大きなアメリカ国旗がペイントされたタンクローリ車を見つけて思わず写真を撮ってしまいました」



右/現場にでると日没まで事務所に戻らず職長と進捗状況、今後の段取りを確認する。  
上/工事事務所の皆さん。小笠の左隣が武田所長。  
下/現場から事務所へ戻ると、翌日のスケジュール調整をする。



my Growing

私が建設業界で学んだこと

視野を広げると発見がある

自分には合っていると感じました」  
小笠は被災地で農業用水について調査研究をしていたが、その根幹にある想いは人々の生活のために何かをしたいということ。より多様な場面で活躍できる建設業界で被災地での経験を活かす道を選んだ。

補修と新築工事で広がった視野

二〇一四年、(株)奥村組に入社した小笠が最初に配属されたのは、首都高速道路の補修工事現場だった。  
「協力会社と一緒に道路のひび割れを探して、補修部分の図面を描く業務がメインで、土やコンクリート、測量機もほとんど触らなかつたのが印象的でした。この現場の所長と監理技術者の二人は何事に対しても真摯に向き合う方で、今でも尊敬しています。管理業務の傍ら毎日朝と晩に現場をまわることで、誰よりも現場のことを把握していました。その姿を見て、私も安全管理や状況把握を徹底しよう心掛けました」  
補修工事だったため、学生時代にイメージしていた業務とは異なり、戸惑うことも多々あった。しかし、所長たちの働く姿から視野を広く持つことを学び、それが自分自身の仕事への取り組み方となった。約一年この補修工事に従事し、次は水門の新築工事現場に配属された。

「この現場では測量や墨出しを担当しました。二年目でしたが初めて担当する業務だったので、

覚えることがばかりで一年生に戻ったような新鮮な気持ちで取り組みました」

この現場では小笠は土木の仕事の基礎を学びながら、教える立場にもなったと言う。

「三年目になると女性の新人社員が配属され私が指導員になりました。先輩として自分の持っている知識はすべて教えたつもりです。ただ、私自身もまだ勉強中の身だったので、分からないことは一緒に考えて考えることも多かったです」  
先輩後輩の関係ではあるが、ともに考え成長してきた仲間でもあった。

現場全体を把握する難しさ

水門の新築工事は竣工を迎え、昨年八月より埼玉県を流れる入間川の堤防樋管改築工事現場へ配属となる。小笠は、測量から水路の掘削、土手の盛土など現場全体の管理を担当している。「構造物や水まわりなど打ち合わせを行う工種が多く、河川工事なので雨の少ない時期に工事が限られるという制約があり、何週間も先のことを見越して工程を組まなければいけません。私はまだ目の前に一杯で、所長からは、『違う人の視点から確認してもらおうように』とよく言われます。現場全体を把握することは難しいですが、やりがいはいくらも感じています。効率よく現場を運営していきたいです」

任せられることが多いのは、今までの現場での取組みが評価され期待されている証拠だ。武



水門の新築工事現場で一緒だった宮地(左)とは、いまま同じ現場で働いている。宮地にとって小笠は姉のような存在だ。

## profile



おがさ・まりえ●1989(平成元)年、徳島県生まれ。大学では農業水利を専攻し、大学院は環境化学専攻。大学院時代の2年間、福島県で農業用水に含まれる放射性セシウムについて研究を行う。2014(平成26)年、(株)奥村組に入社。首都高速道路の補修工事、水門の新築工事を経て、2016(平成28)年8月より入間川工事事務所に配属され、今に至る。

田所長はこのように話している。

「小笠にいろいろと任せていますが、現場全体を把握するには普通一〇年はかかります。正直なところ負担が大きく悩むことも多いと思いますが、小笠ならできると信じています」

最後に、小笠にとって土木の仕事とはどういうものか聞いてみた。

「泥臭いけどやりがいを感じています。忙しい時には休日を返上して仕事をすることもありませんが、その分まとめて休めるときには、海外に行ったりフレッシュします。今後はトンネルなどまだ経験していない現場に行って、もっと視野を広げたいと思っています」

一つひとつの仕事を着実にこなすストイックな小笠には、現場がよく似合う。公私のメリハリをつけた働き方で、小笠はこれからもたくさんの方の発見に出会おうだろう。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと